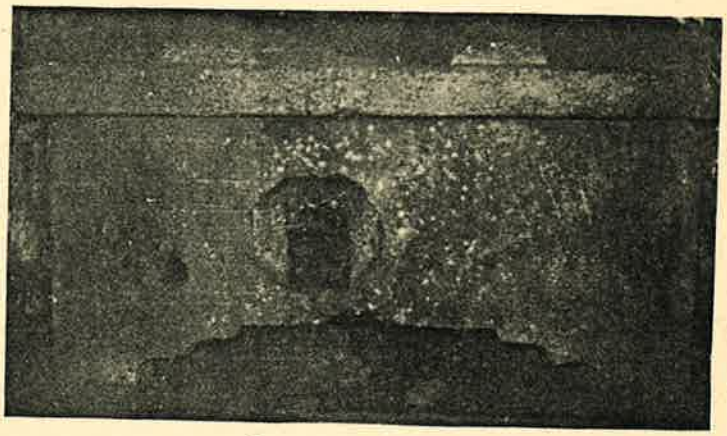
国指定史跡

宝塔山古墳石室調査概報

文化財保存整備事業に伴う学術調査

1968．3



前橋市教育委員会

序

昭和４２年度文化財保存修理補助金事業に係る宝塔山古墳石垣修理を実施することになり、事業費５０万円（国２５万円、県７万５千円、市１７万５千円）をもつて、昭和４３年２月から１か月間にわたり、修理と調査を行なつたわけである。

宝塔山古墳は横穴式石室を有し、截石、切組積みの複室で、羨道、前室、主室にわかれ主室には精巧な家型石棺が安置されている。この脚部の格狭間の手法は仏教文化への過渡期にあることを示し、学術的にも貴重な文化財である。

保存修理に当り設計を市都市計画課公園係に依頼し、石垣修理は立見建設に請負わせた。特に石室の調査は普通の工事とことなり学術的、専門的な技術を必要とするので、群馬大学教育学部史学研究室に委託したところ心よく受託してくださり、３月４日から１０日間にわたり、調査を実施していただいたわけである。

この調査により、今まで埋められていた石室の入口、前庭部の構造が明らかにされたことと、今まで何人も気づかなかつた石室入口天井石が落下していたのを発見されたこと等、多大の成果を得ることができた。

石垣修理については四方のうち、西、南が市道に面し、前々から崩れ、はらみ危険な状態にあり、古墳保存の上から、永久的に積みかえを行なつたものである。

修理工事、石室調査により一層保存に努力する必要を感じ得たわけである。

本年度の事業では、まだ前庭部、入口の天井石等の復原など整備に万全を期したい。

本調査に当り、群馬大学教育学部尾崎先生、石川正之助先生はじめご協力いただいた先生方、学生諸君に厚くお礼申しあげる次第である。

なお、石垣修理、石室除土に力添えいただいた立見建設の方々にも敬意を表したい。

この調査概報が　本古墳の歴史的、学術的価値を一段と重要たらしめたこと、本石室の構造が一層研究上活用されることを期待いたしお礼のことばといたしたい。

昭和４３年３月

前橋市教育委員会

教育長　関　佐　団　次

宝塔山古墳の概要

上越線群馬総社駅下車南方約１Km、前橋市総社町総社字屋敷南１６０６番地　総社小学校の西に位置している。上毛古墳綜覧オ１０号墳である。平地に造られた５４ｍ、高さ１１ｍの壮大な方墳で、この種の型は本県ではめずらしい。後期古墳で奈良時代初期のものである。

中腹部に横穴式石室が南に開口し、石室は切石切組積の複室で羨道、前室、玄室にわかれ、その精巧さは本県随一、全国でもまれなものである。擁壁には三和土をほどこしたらしく、今なおわら、および布で押しつけた跡がある。前室長さ3.8ｍ、幅1.95ｍ、高さ1.82ｍ、玄室は長さ約3.02ｍ、高さ約2.6ｍ、幅約3.0ｍできわめて整美である。

玄室の中央に長軸に対して直角に精巧な家型石棺があり、底部に実にすばらしい格狭間の形がくりぬかれ、四本の脚となつている。

古墳築造に当り、仏教文化の影響が、逆に古墳文化に及んでいるという、過渡的なものとして貴重である。副葬品については不明である。

この古墳の南方約５００ｍの地に白鳳時代の山王廃寺心礎、根巻石および鴟尾が保存されているが、これらの石の刻みは本古墳の石室、石棺に類似しており、併行に築造されたとみられる。

とにかく宝塔山古墳は、古墳文化末期をかざり、仏教文化的色彩を多分にふくんだ過渡的な遺産として重要な史跡である。

〔－郷土の文化財－　尾崎喜左雄より〕

昭和４２年度宝塔山古墳環境整備事業に伴う学術調査

石　川　正　之　助

I

昭和４３年２月１日付、前教社発オ５７号によつて前橋市教育委員会から委託された「宝塔山古墳石室調査」を、群馬大学教育学部史学尾崎研究室において、昭和４３年３月４日から１２日まで、更に同１６日の１０日間に渉つて実施した。

調査は、群馬大学教授尾崎喜左雄の指導下、同研究室学生４年生４名が主としてこれに当り、同研究室学生・卒業生８名が随時これを援助した。調査参加者は下記の通りである。群馬大学教育学部４年生植竹仁、小山政子、中村富夫、松本正代、吉田雅美、同３年生志村秀子、同２年生清水和夫、同卒業生　勢多郡宮城村立宮城中学校教諭松本浩一、群馬大学教育学部聴講生石川正之助、勢多郡粕川村立粕川中学校教諭根岸照子、前橋市立総社小学校教諭福田紀雄、前橋市立城南小学校教諭松元れい子

更に調査期間前半において、立見建設作業員延１１名の助力を得た。

II

作業は、

オ１に埋没していた石室入口部分を、床面を認定して堀開し、石室入口部分の原状を確認すること。

オ２に、石室入口前に付設を予想される前庭の存否を発堀によつて確定すること。

オ３に、これらに付帯して、これが構造・構築に関する資料を出来得るかぎり得ること。

オ４に、石室ならびにその付帯施設の実測図の作成をおこなうこと。

以上４点を目標に調査を実施した。

オ１点に関しては、礫敷きの床面下構造を室入口玄門状構造前で確認し、このレベルで前方へ堀開を続け、羨道入口部分に達した。しかしながら、羨門部分は入口天井石オ１石の崩落とともに崩壊した模相で、地形の礫の堆積状態、後込砂礫の状況、前庭両側袖壁石組の配列状態から、その位置を推測せざるを得なかつたが、現存する左右壁体根石の前面に更に截石１石を加えた規模であつたものと推定される。推定されたこの石室先端と現存する天井石前面の巨離は、今回の環境整備事業に当つて、立見建設の発見した、造出しある天井石最先端と推定される石材下面の巾とほぼ合致する。また、後世石室入口部分を閉塞するために組みあげられたと推定される石材は、その規格・手法からして、この部分両壁体に使用せられていたものと推定される。

オ２点に関しては、推定される羨門部右側で検出した袖壁石組を、更に右側へ掘開することによつて右袖角を確定した。この位置は、羨門部中央から約４ｍ５０に当つている。更にこの部分かから右に折れてトレンチ状に堀開を続け、前方１ｍ８０までその残存する根石を確認した。しかしながら、それから前は近世の墓地造成によつて堀削されている模相である。また、左側でも右同様、石室中軸線から約４ｍ５０の位置で軸角を確定し、更に前方３ｍ７０においてその先端を

確認し得た。即ち、転石に削石をまじえた石組に囲まれた、礫敷きの、上底（羨門部両側）約9m、高さ（奥行）3m70前後の開きの極めて少ない台形のスペースなることが判明した。しかしながら、叙上の如くこの石室は羨門部を欠き、殊に左袖壁は羨道左壁面から2m近くも失なわれており、直接石室と結ばれてはいないが、

① 軸線を基準とした石室の全体構成と、このスペースの位置・方位はよく合致し矛盾しない。
② 残存していた左右両角におけるこの床面は、羨道床面とほぼレベルを一にしている。
③ 左袖壁石組と、羨道部壁体後込被覆構造との間に構造的連関が認められる。
④ かかる形態のプランは、この時期の前庭プラン一般と合わせて考えた場合矛盾しない。
⑤ 左右両袖壁の石組の組み方は、古墳葺石の組み方一般と共通していて矛盾しない。
⑥ このプラン各部分の計測値は、石室企画において使用されたと推定される唐尺完尺値近似である。

以上の6点から、石室構築当時付設の前庭と一応推測される。但し、少なくとも1回の補修を経たものと予想される。また、石室開口後の攪乱は著しく、崩落している天井石下面は、叙上の羨道床面ならびに前庭床面から30cm程度下に位置している。

オ3点に関しては、前庭左軸壁調査に当つて、後込被覆構造の施設状態を確認し、羨道入口部分においてすら側壁面から2mにも及ぶ後込がなされていることが明らかになつた。また、前室入口玄門状構造直前において、床面下50cmまでピットを試みた結果、礫、石材削屑、転石による各々層をなす地形を確認した。これはこのレベルに止まるものではない。

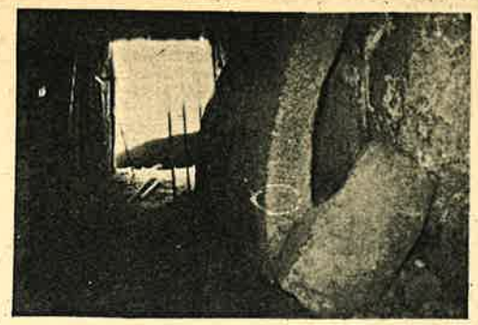
オ4点に関しては、石室、前庭を合わせて実測図を完成し、叙上の諸事実を記録に止め、更に写真撮影を行なつた。

III

今次の調査によつて下の諸点が明らかとなつた。

1. 石室規模の全貌が明らかとなり、その企画はおおむね唐尺40尺と推定される。
2. 他諸古墳に比して、きわめて規模の大きな前庭の付設が明らかになつた。
3. 極めてすぐれた石工技術、土木技術によつて強固な構造を造りあげている。
4. 玄室に安置されている石棺前面にあけられている八角形の穴の蓋石が検出され、この穴はおおむね当初からの造作と考えてあやまりない。
5. 前室入口玄門状構造根石下に狭まつて、唐銭、宋銭5枚が重なつて検出され、その開口時期は中世に遡るものではないかと推測される。

宝塔山古墳全景（南面より）

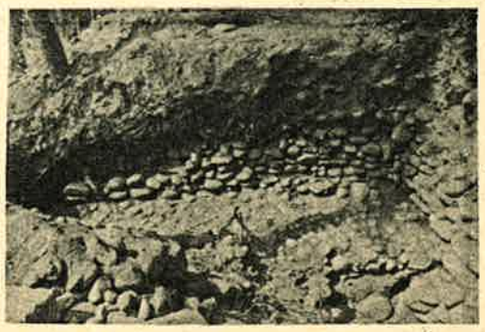


石室中室より羨道をのぞむ（開さく状況）

前庭部の状況と落下していた天井石

開さく前の状況

前庭部（東側）の状態

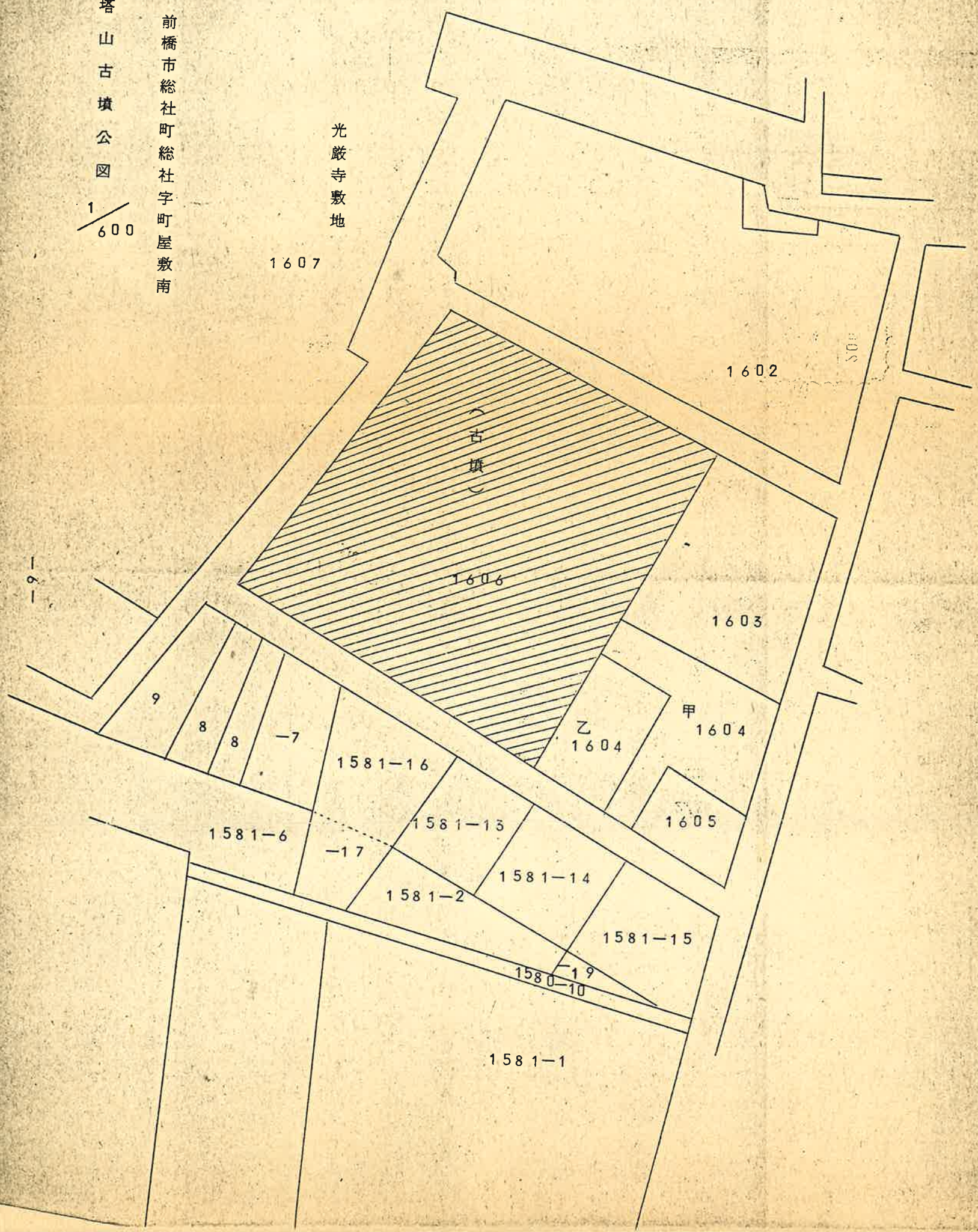


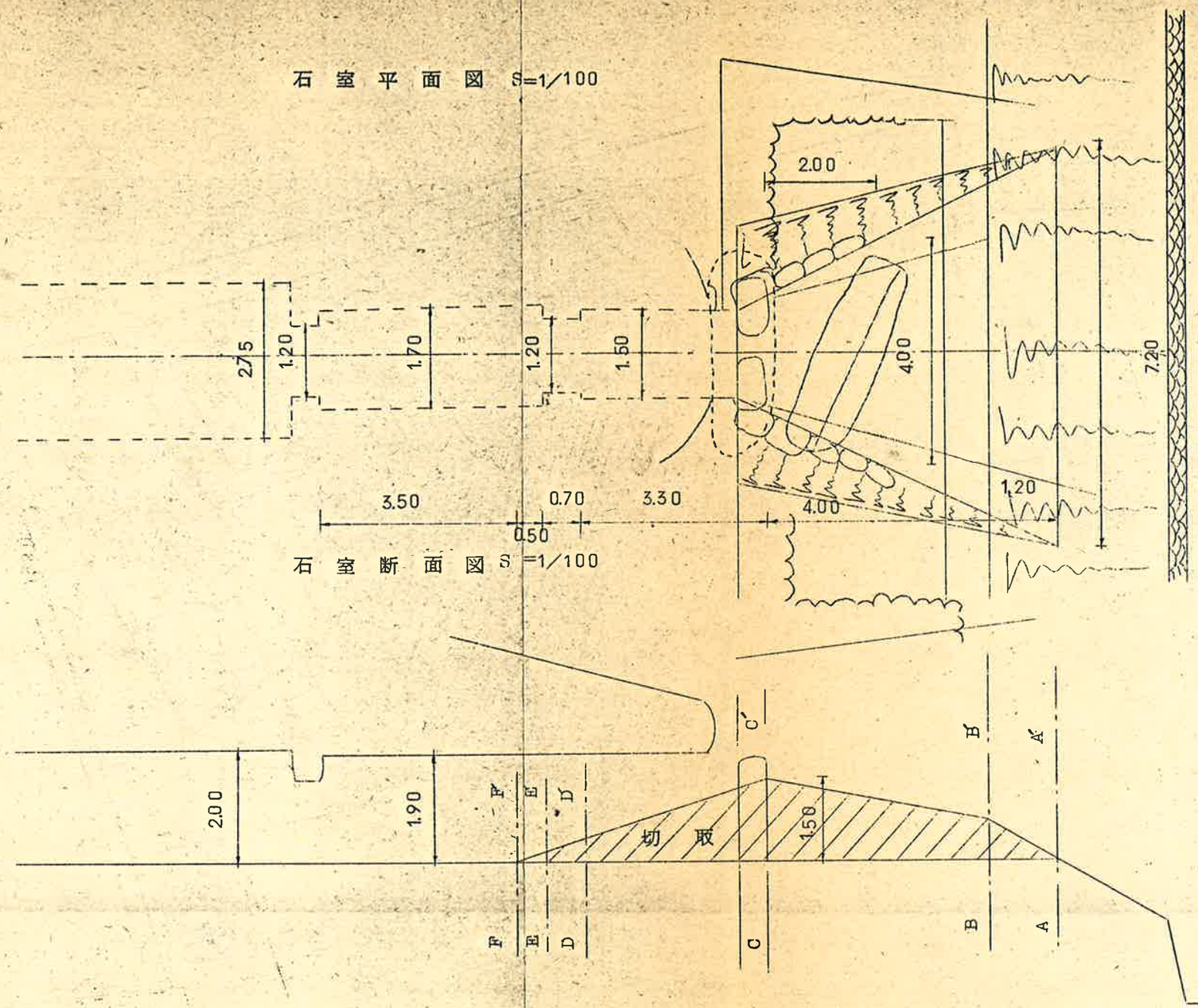
前庭部（西側）の状態

宝塔山古墳公図

1/600

前橋市総社町総社字町屋敷南





石 室 平 面 図 S=1/100

石 室 断 面 図 S=1/100